不登校の現状分析と対応に関する研究

－保護者、地域を巻き込んだマニュアルづくり－

須崎市立吾桑小学校　教　諭　西村　大典
高知県心の教育センター　指導主事　山下　千代

不登校はじめ青少年や児童生徒を取り巻く社会状況や教育環境、生徒指導上の諸問題の現状と正面から向き合ったとき、今学校、行政、地域が一体となって子どもを守り育てる教育のシステム化が重要であると考える。子どもや子どもを取り巻く現状を把握し、原因分析を行い、今何が必要なのかを目的化させ、手だて（対応方法）を考えるべきである。手だてとして各立場が責任を持って自分の役割を果たし、連携し取り組める内容であることが重要と考える。そこで、アンケート調査の実施、分析や考察等から学校現場で活かせる資料やマニュアルの研究を行った。
キーワード：よみがえる地域の教育、県民の声、学校にがんばって来られる理由、システム

１　はじめに

高知県の不登校児童生徒数は、公立小中学校合わせて千人を超える年がここ数年続き、昨年度の発生率は全国ワースト１位である。不登校は早期に解決することが難しく、自立に向かうまでに長い日数がかかる子も多い。学校現場では様々な方法を取り入れて取り組み、チーム支援を行ったりスクールカウンセラーも配置され対応しているが、減ることが少ない。特に、小学校高学年から２倍３倍と増え始め、中１～中２でさらに増える。今や、学校や保護者だけの問題ではなく、深刻な社会問題であり地域や行政が真剣に取り組む段階に至っているのではないか。

２　研究目的

不登校の現状に対応する方法としては、不登校の子どもに寄り添い支援する方法、不登校にならないための予防方法の二つに大きく分かれる。本年度の研究においては寄り添い支援する方法も文献や研修会等で学ぶが、「不登校にならないための予防方法」を中心において研究することとした。

不登校にならないための予防方法の研究にあたり、次の研究マネジメントを考え実行することとした。

まず研究テーマとして「不登校の現状分析と対応に関する研究」と決定した。それは不登校の現状分析をする中で見えてくる様々な実態に対して、「実態の何に対して」対応するのかをはっきりさせるためである。当初は、不登校の解決に貢献できる研究よりも予防するための方法には何があるかを研究の中心におこうと考えていた。そして予防するための方法として、地域、保護者、行政、学校が子どもや青少年に対して連携して取り組み、役割分担と責任を果たす「よみがえる地域の教育」が大切だと考えた。そこで、この方法の中心や核となる手だてとして、「保護者、地域を巻き込んだマニュアル」が出来れば、連携して取り組んでいけるのではないかと考え、「－保護者、地域を巻き込んだマニュアルづくり－」を研究し、来年度以降教育現場で検証できればと考えている。

３　研究仮説

(1) 高知県内や全国の不登校の傾向や、きっかけ、各校の対応、年度ごとの推移の現状を分析できれば、取り組む道筋が拓かれていくだろう。

(2) 事例研究等に参加することによって現場の取組や、児童生徒の内面的な部分について理解すること

ができれば、児童生徒に寄り添いサポートできる活動やカウンセリング、教育相談の部分に生かすことができるであろう。

(3) 環境整備や悪条件の改善、予防マニュアル、人を大切にする教育等が進んでいけば不登校等の諸問題が解決していくであろう。

(4) 地域、保護者、子どもを取り巻く関係機関のネットワークづくりを行い、地域で守り育てる教育を実践できれば不登校等の予防となり、健全な児童生徒の育成につながるであろう。

4　研究内容

(1)　現状分析→調査Ａ→分析考察→目標設定→研究方法→調査Ｂ→分析考察→
方法に達するための手だて→検証→評価

①　不登校の実態把握のために、心の教育センター発行の「生徒指導上の様々な諸問題の現状について」や、県童生徒支援課の資料等から平成 11 年度～15 年度までの不登校児童生徒数の調査。

②　文献や研修会から、不登校の原因等や不登校に寄り添い支援する方法の研究。

③　学校現場の取材や事例研究に参加し、不登校の実態や取り巻く環境等の実態分析。

④　「学校にがんばって来られるためのアンケート」調査の実施と分析。

⑤　「子どもの問題アンケート調査」の実施と分析。

⑥　人権教育や道徳教育と不登校の関係の把握

⑦　不登校にならないための予防マニュアルの作成。

5　不登校の現状分析

(1)　不登校の年度別推移（平成 12 年度から 15 年度まで）（小学校学年別）

	平成１２年度			平成１３年度			平成１４年度			平成１５年度			
小学	新規	継続	解決	新規	継続	解決	新規	継続	解決	新規	継続	解決	平均
1年	14			20			16			12			15.5
2年	８＋②	8	6	12＋④	6	8	17＋⑩	13	7	12＋⑪	15	1	22.7
3年	19＋⑯	19	3	28＋25	14	2	21+21	18	0	15＋⑦	22	8	39
4年	30＋⑬	27	17	24＋16	30	8	13＋３	26	16	19＋②	22	17	47.7
5年	31＋24	33	7	32＋14	39	18	32＋15	38	16	23＋⑫	28	11	64
6年	31＋30	52	6	26＋５	43	21	32＋14	53	18	36＋⑱	52	18	81.2
合計	133＋85	139	39	142＋64	132	57	131＋64	148	57	117+50	139	55	
年度平均	22.1 17	27 8	7 8	23.6 12.8	26. 4	11.4	21.8 12.8	29. 6	11.4	19.5 10	27. 8	１１	45.04

(2) （中学校学年別、年度別）

	平成１２年度			平成１３年度			平成１４年度			平成１５年度			
中学	新規	継続	解決	新規	継続	解決	新規	継続	解決	新規	継続	解決	
１年 ＋	１３７ １２５	７４	１２	１２３ １０８	６８	１５	８７ ７２	５４	１５	１１２ ９１	６４	２１	179.75
２年	１０６ ＋９５	１５６	１１	１３２ ＋９３	１７２	３９	１１８ +９５	１６８	２３	１１０ １０３	１３４	7	274
３年	８９ ＋５６	２４５	３３	８５ ＋６１	２３８	２４	９０ ＋２５	２３９	６５	９４ ５６	２４８	３８	332
合計	３３２ ２７６	４７５	５６	３４０ ２６２	４７８	７８	２９５ １９２	４６１	１０３	３１６ ２５０	４４６	６６	
学　年 平均	１１０ ９２	１５８	１９	１１３ ８７	１５９	２６	９８ ６４	１５３	３４	１０５ ８３	１４８	２２	261.9

(3) 不登校の児童生徒数（小中合計）

年度	不登校総数（人）	新規	継続	上乗せ
平成１２年度	１０７９	４６５（43.1%）	６１４（56.9%）	３６１（33.4%）
平成１３年度	１０９２	４８２（44.1%）	６１０（55.9%）	３２６（29.9%）
平成１４年度	１０３５	４２６（41.2%）	６０９（58.85%）	２５６（24.7%）
平成１５年度	１０１８	４３３（42.5%）	５８５（47.5%）	３００（29.4%）
平均	１０５６人	４５１．５人	６０４．５人	２９．４２％

(4) 解決児童生徒数（小中学校別）

解決児童生徒	小学校（人）	中学校	総数	不登校総数にしめる割合
平成１２年度	３９	５６	９５	９．７３％
平成１３年度	５７	７８	１３５	１２．３６％
平成１４年度	５７	１０３	１６０	１５．４５％
平成１５年度	５５	６６	１２１	１１．８８％
平均	５２人（８．６人）	75.7 人(25.25 人)	１３０．２５人	１２．３３％

この表から読み取れること

○ 平成 12 年度～15 年度までの不登校児童生徒の中で、年度内に解決している人数は平均 130 人、割合は 12.3%となっている。

○ 小学校では、学年平均 8.6 人、中学校では、学年平均 25 人と児童生徒数に比べると非常に少ない。

○ 年度内新規不登校数は、平均 451 人、不登校全体の中の 42.7%に上り、半数近くが毎年増えている。

○ 継続人数は、平均 604 人、全体の中の 57.3%に上り半数以上が不登校を引きずっている。

○ 不登校の割合は、小学校平均４5.04 人、中学校平均 261.9 人である。学年ごとでは、小１・10 人～20 人、小２・20～30 人、小３・40 人前後、小５・50 人～70 人、小６・80 人台の児童が不登校である。

○ 中学校では、中１平均 180 人、中２平均 274 人、中３平均 332 人となっている。

○ 小１年～小４年までは、学年が上に上がると 10 人ぐらいずつ増えているが小５小６では 20 人増えている。

○ 中１になると、２倍以上、中２で 1.5 倍、中３では小６の４倍となる。

○ 小学校低学年ではかなりの数で解決できるのは、学校の取組か？

○　中１で急に増えるのは、二通りの仮説①学校不適応（クラブ、人間関係、教科との関連）②小学校での予備軍が中学校で芽を出す。
○　中３では、年度内に解決する数が中１、中２に比べてかなり多いのは、進路の関係か？
○　小３，４年でかなり減ってくる（３分の２）のは、どんな取組か、手がかりはあるのか？

(5)　アンケート調査の実施

不登校になると短期間ではなかなか解決できない。学校現場では子どもに寄り添いケアする方法やチーム支援等取り組んでいるが、上の分析でも分かるように、年度内に解決しているのは毎年平均12%と少なく、すぐに効果が表れない難しさがある。そこで、現在学校に通っている児童生徒に、「学校にがんばって来られる理由」は何なのか、「学校の魅力」は何かを問いかけ、子どもたちのために学校として伸ばすところ、子どもたちの苦痛や心配の種になり改善すべき点、これから問題行動になりそうで注意すべきところはどこかを調べ分析した。調査対象者は、須崎市内の小学校５、６年生456名、県内中学生898名で調査時期は平成16年10月10日より11月1日頃である。

①　学校生活アンケート　（小学生対象抜粋）の結果と考察１

■　学校は楽しいか

☆　全体的に見てみると学習意欲があり授業も楽しく感じる子どもが多い。しかし授業をつまらなく感じている子どもや、学習用具を忘れる子どもが半数近くいて、学習に対する意欲低下が気になる。「つまらない」が「分からない」になると「学校に行きたくない」に繋がってくる。

■　受容感に関して

☆　大部分の子どもが先生に対して信頼感をもっている。しかし自分が先生に受け入れられていると感じているが、自分と教師との考えの違いも出てきているのがこの年頃の特徴である。先生が日ごろの態度や行動からの誤解や、嫌悪感を与えていることがあるかもしれない。もっと相談相手になる必要があるのではないか。

■　友人関係について

☆　全体的には友達もおり一人ぼっちで過ごすこともなく円満であるが、５％が寂しく一人で過ごしており、学校に来たくない気持ちが強く、気をつける必要がある。

■　学級風土について

☆　ほとんどの子が学級を安心しておれる場所と感じており、まとまりもよく自分を大事にしてくれると感じている。しかし約９％がほっとできない、まとまっていないと感じている。この約９％の子どもたちは、学級にとけ込めず、「学校に行きたくない」気持ちが強いことが「学校に行きたくないと思うときがある」の設問に影響されていた。

■　抑うつ傾向について

☆　寂しい、泣きたい、逃げ出したい子どもが９％ぐらいいて、かなりしんどい状態にあるが、それ以外の子どもは現状に満足している。しかし自分自身で決定できない子どもが多いのは、今までの育った環境から人に依存するようになったのではないか。

■　生活リズムについて

☆　食生活はよくなったが、睡眠が足らず勉強にも影響するおそれがある。

■　学校に行きたくない時がある　（%で表示）

小学校児童５、６年（回答者456名）

21　学校に行きたくないと思うときがある

１よくある	２　時々	３　あまりない	４　ほとんどない
23	24	30	23

29　それはどんな理由ですか

1　勉強がよくわからない	2　友達がいない	3　先生と話すのが嫌	4　家で辛いことがある	5　宿題ができていない	6　いじめられる	7　給食の時間が辛い	8　その他
28	2	6	7	8	6	6	37

30　行きたくないのに休まない理由はなぜですか

1　勉強が遅れると困る	2　友達がいる	3　先生がいるから	4　親が心配する	5　授業が楽しい	6　休み時間が楽しい	7心配してくれる人がいる	8　家にいたくない	9　その他
23	24	2	13	2	15	8	3	9

31　学校に行きたくないと言ったときの家の人の反応

1　話をきちんと聞いてくれる	2　「行きたくなければ行かなくていい」と言う	3　何も言わない	4　「行きなさい」とうるさく言う	5　動かないと、身体を引っ張ってでも、行かせようとする	6　暴力をふるう	7　先生に連絡する	8　その他
23	8	11	34	7	1	7	9

32　学校の中で、心の落ち着く場所はどこですか

1　教室	2　職員室	3　校長室	4　教育相談室	5　保健室	6　事務室	7　図書室	8　トイレ	9　体育館	10　運動場	11　特別教室	12　その他
25	1	0	0	18	0	25	4	6	12	5	4

33　学校の中で一番安心できる人は誰ですか

1　担任	2　校長	3　教頭	4　養護教諭	5　教育相談	6　事務	7　友達	8　その他
23	1	3	12	1	0	55	4

②　小学校のデータから読み取れること・傾向　（結果と考察２）

★　学校に来る一番の理由は「友達」である。友達との人間関係が上手くいけば学校が楽しく、クラスの中でも安心できる。

★　次に、「勉強が分からない、つまらない」が大きく影響し、来たくない理由も「勉強が分からない」であった。それでも来る理由が「勉強が分からないと困る」であり、毎日の勉強や家での宿題が友達に続いて大きな影響を持っている。

★　小学校生活で子どもに影響を与える教師は、担任、養護教諭、専科、図書教員、の順である。信頼関係ができ、担任が自分の気持ちを分かってくれていれば学級が一番安心できる場所である。また養護教諭や担任外教諭等が児童理解に努めていれば、児童の不安や不満のはけ口ができて学校に行きたくない思いには至らない。職員間で教育相談等を学び、チーム支援する機会を増やしていけばいいのではないか。

★　学級経営、特に児童の心理を理解し、児童間の人間関係をつかんでいく努力が必要である。この努力は担任との距離や虚脱感を少なくさせていくと思われる。

★　基本的生活習慣の乱れが、「だるい、眠い、しんどい」に繋がりやすく学校に行きたくない要因になっている。

③　**学校生活アンケート**回答者 596 人（中学生対象抜粋）の結果と考察

■　一週間の内、楽しい日はどれくらいあるか。（百分率・％で表示）

１　ほとんど毎日楽しい	２　楽しい日が多い	３　どちらとも言えない	４　楽しくない日が多い	５　ほとんど毎日楽しくない
31	34	24	6	6

Ａ　がんばって学校にいける理由

１　授業や勉強が楽しい

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
7	41	36	16

２　部活や楽しい行事があるから

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
40	34	19	7

３　友達や仲間と遊ぶのが楽しい

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
63	21	9	8

６　将来のために勉強が必要。

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
32	43	18	7

７　学校休むと勉強が遅れる（分からなくなる）

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
42	34	17	7

★　中学校でがんばっていける理由は、大きく三つの理由が挙げられる。一つめは、「友達や仲間と遊ぶことが楽しい」で、二つめに「部活動での人間関係や励まし、楽しさ」である。三つ目に「勉強が将来必要になる」と感じていることと、「勉強が分かりたいとい」うことである。

先生や授業が楽しいということはあまり感じておらず、がんばってくる理由や休む理由とは関係がないと思われる。

Ｂ　一週間の内、学校に行きたくない日はどれくらいありますか

４　毎日	３思う日が多い	２あまり思わない	１全くない
9	17	40	35

★　学校を休みたいと言う理由の傾向は、まず身体の不調が挙げられる。生活習慣の乱れ、睡眠不足や、クラブの疲れ、あそび疲れが挙げられ、休日の翌日に休みたいと言うことではないか。次に勉強が解らない教科があるとき、つまらない感じがあるのではないか。

★　「学校以外におもしろいことがある」という設問には半数の生徒が興味を示している。

★　10%弱の生徒が友達との輪に入れずに無気力な状態に陥っている。今後学校に行きにくくなることが予想される。
★　教師との人間関係にはあまりこだわりがなく休みたい理由には関係ない。また校則や決まりにもあまり煩わしさを感じていない。

C　学校に行きたくなくてもすぐに休まずにいける理由

1　不満や嫌な気持ちをその場で周りの人にぶつける

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
6	15	31	48

2　嫌なことをされても無視する

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
19	28	28	25

3　諦めて自分だけで我慢する

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
20	25	28	27

4　趣味やゲーム等をして、嫌なことを忘れる

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
27	23	25	24

5　人に聞いてもらい、気持ちをすっきりさせる

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
21	23	28	27

5―1それは誰ですか

４　家族	３　教師	２　友達	１　その他
26	4	66	4

6　あなたが落ち込んでいると元気づけてくれる人がいる

４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
28	24	29	20

7　解ってくれる人がいる

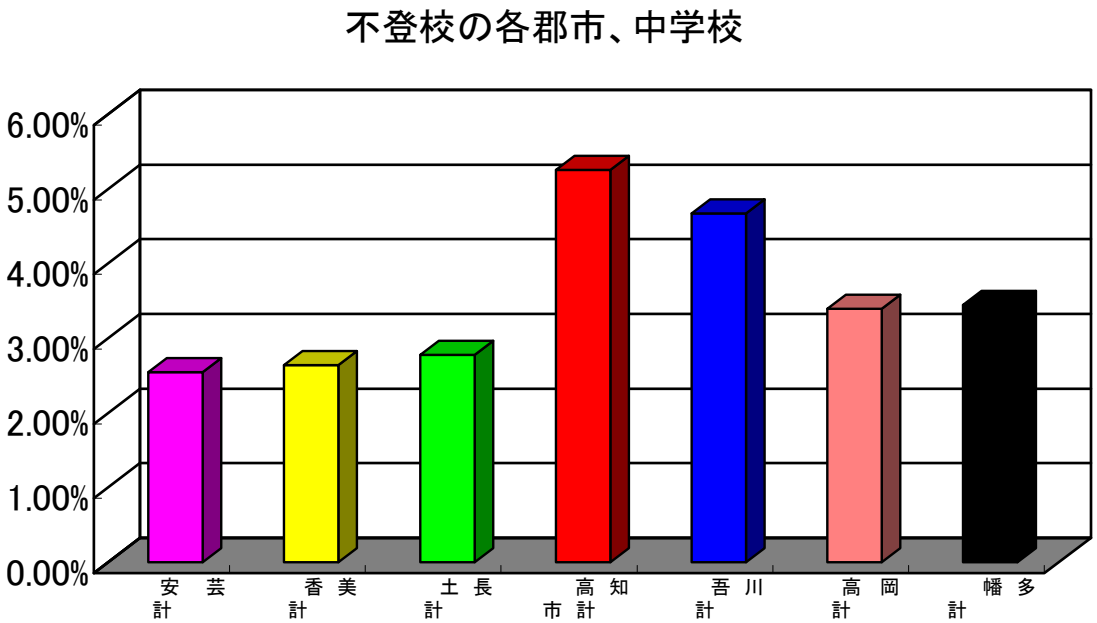
４とてもそう思う	３少しそう思う	２あまり思わない	１全くない
27	18	36	18

★　学校にがんばって来られる理由の大半は、嫌なことや困ったとき、友達に相談できることや自分の中で気を紛らわす処理能力を身につけてきたことだと考えられる。男子は自分ひとりで誰にも相談しないで解決する傾向が見られ、女子は相談する幅が友達、家族、男友達等、広がってくる。そして家族の愛情に関しては半数以上が感じており、安心感と満足感が表れている。困ったときの家族の声掛

けが非常に大切である。大切にしてくれる人が「あまりいない」「全くない」と答えた生徒が併せて42%いる。これらの生徒達にとって、職員の声掛けや支えが重要なキーになることは言うまでもない。

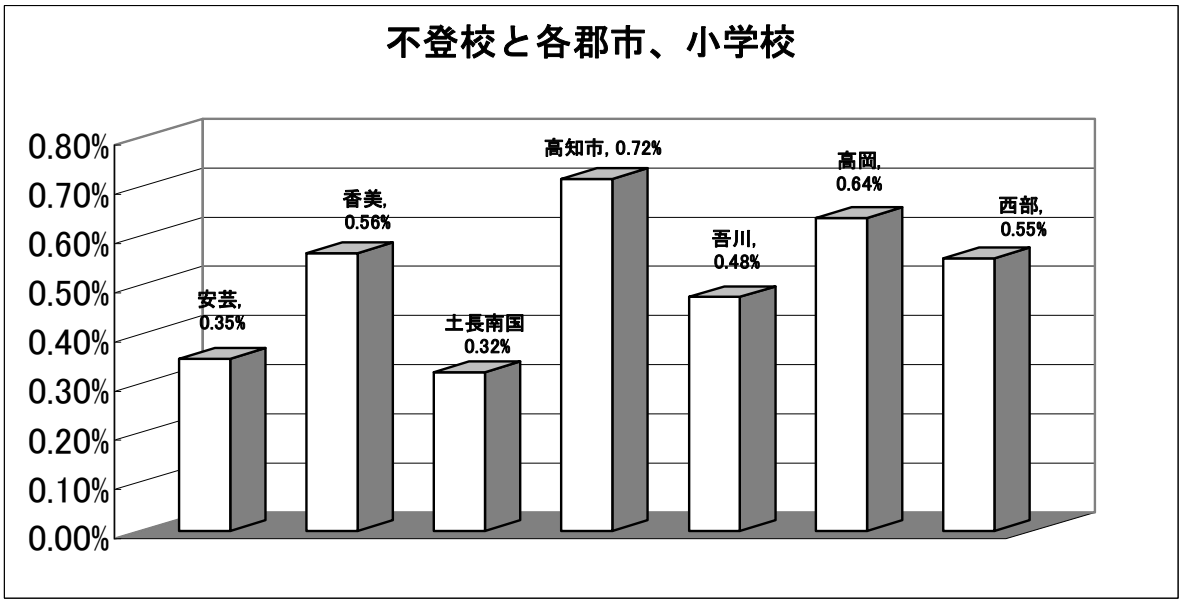
(6)　各郡市における中学生不登校の割合

中学校（平成 16 年度調査）各郡市の生徒数にしめる不登校生徒数の割合



○　中学校では、生徒の分母数は違うが、高知市が５％をうわまわり、多い学校では１クラスあたり3.88 人になる。吾川郡が多いのは小規模校の中に不登校の生徒が占める割合が高く総人数的には多くない。

小学校（平成 15 年度調査）各郡市の児童数にしめる不登校児童の割合



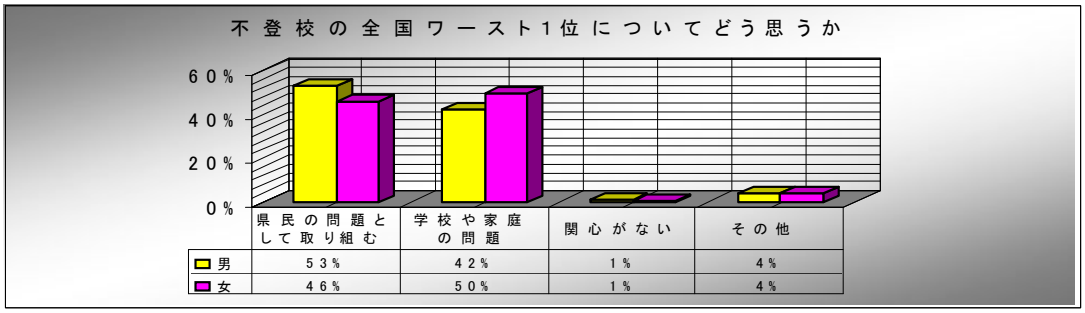
○　小学校でも中学校同様高知市が多く、大規模校に多い。これはそれ以外の郡にも言えることで、一校に７～８人ぐらいいる計算である。

(7)　「子どもの問題アンケート調査」からみえる県民の声

この調査は、不登校はじめ問題行動や青少年の実態に対して、県民がどのような意識を持っているか、県教委や学校の取り組みに対しての意識はどのようなものであるかを調べ、意見を地域、保護者、学校、関係機関が協力して子どもを守り育てるためのマニュアルや資料として教育現場等で活用できるものを作る目的で調査した。

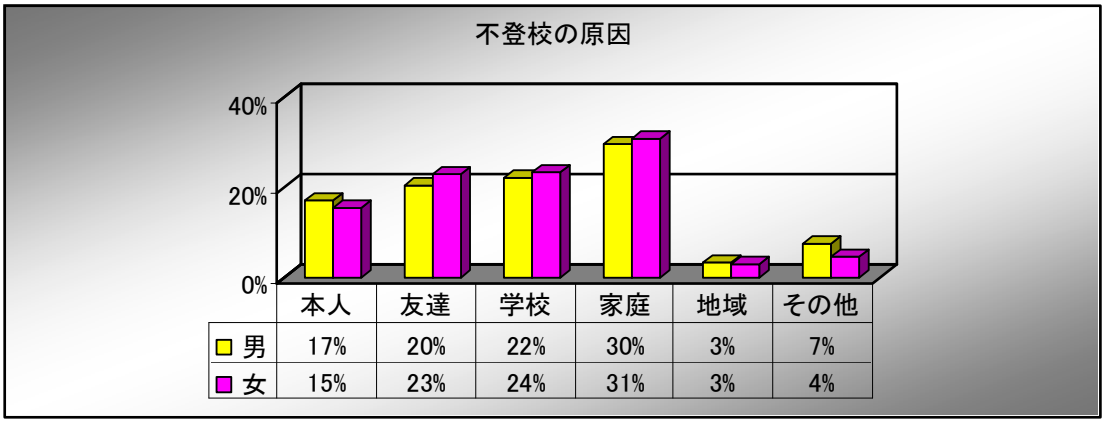
対象者（18 才以上の県民・488 人回答）実施期間（平成 16 年 12 月 6 日より 12 月 25 日）実施方法（街頭調査や聞き取り調査）

不登校の全国ワースト１位についてどう思うか



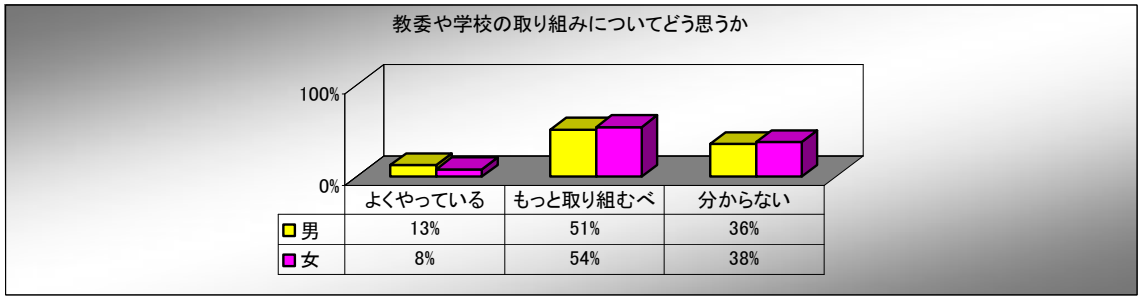
○　不登校の全国ワースト１位について、多くの人は「県民の問題として受け止めるべき」と「学校や家庭の問題」として捉えていて関係ないと思っている人は少ない。

不登校の原因は何と思うか



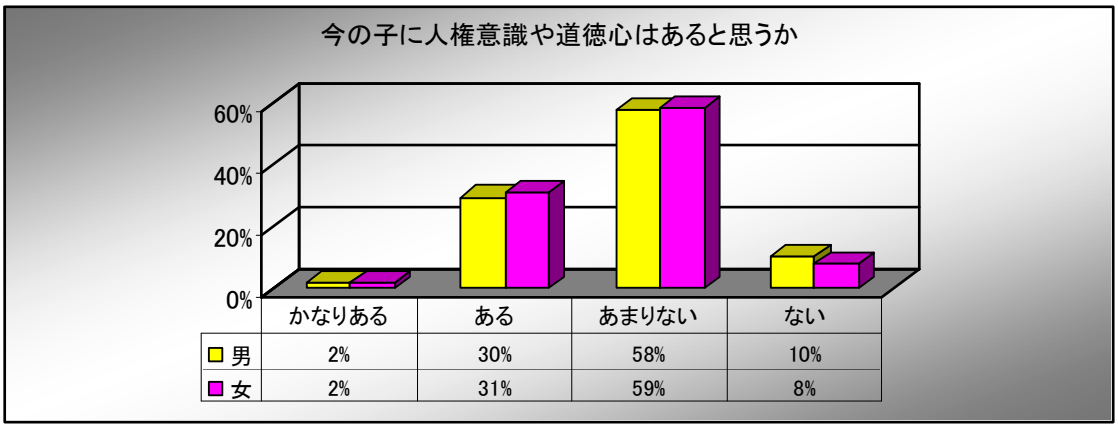
○　不登校の原因として県民が考えているのは、家庭、学校、友達、本人と続いている。原因が友達では、友達からのいじめや、友達関係の不和ではないかと考えている。

教委や学校の取組についてどう思うか



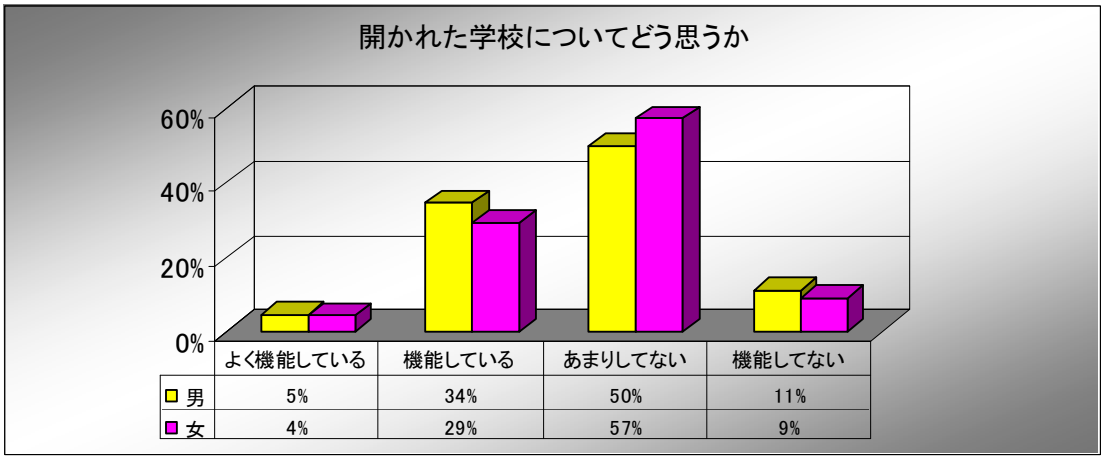
○　教委や学校の取組に対しては、「良くやっている」に比べ「もっと取り組むべき」「わからない」がかなり多くあまりしられていない。

今の子に人権意識や道徳心はあると思うか



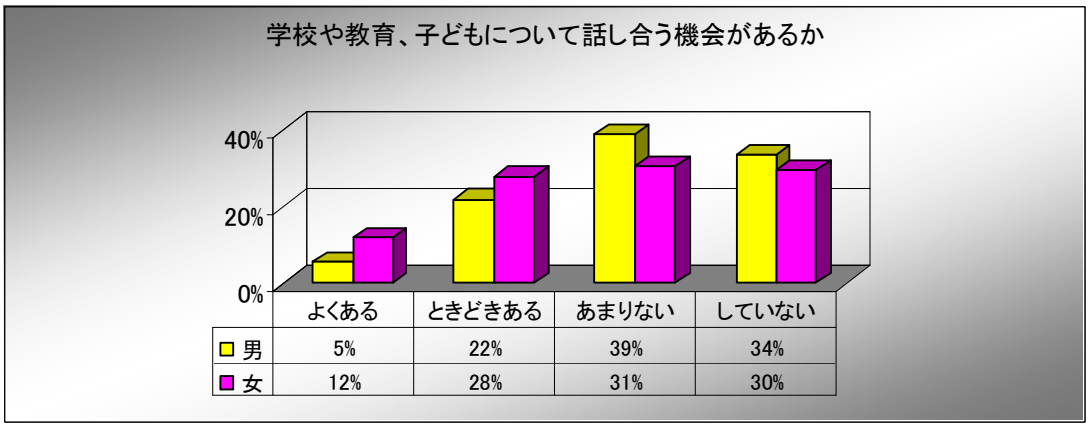
○　人権意識や道徳心は「ある」の倍以上「ない」と考えている人が多い。

開かれた学校についてどう思うか



○　機能していないという意見の方が「機能している」より多く、取組が伝わっていない。

学校や教育、子どもについて話し合う機会はあるか



○　男性に至っては 70%以上、女性でも 60%以上が話し合う機会が無いと答えているということは、近所づきあいや地域の教育力がかなり低下し、意識の都会化が進んでいると考えられる。

★　左記に抜粋した中では、学校等の情報が上手く流通していないこと、取組が見えにくいこと、地域と学校や子どもとの関係が希薄になっていることが読み取れ、反対に子どもに対しては批判が強くなってきている。

６　地域、保護者、学校、行政機関の連携マニュアル

子どもの発する信号を早期に理解するために　　（骨格部分抜粋）

(1) 不登校はじめ、様々な諸問題を予防するためには、「よみがえる地域の教育」が大切である。そのためには、地域、保護者、学校、関係機関が密に連携しながら各々の役割を持ち、責任を持って教育や支援に当たることが大切である。そのためには参考となるマニュアルが必要であり、マニュアルに沿って児童や青少年とかかわりながらもっと必要なことやこれは必要ではない等の意見を取り入れながら、今の実態に対応できるかを検証し、実態に応じた対応方法を見いだして実行することである。

学校　＜　楽しい、嬉しい、がんばろう＞

小学校では、担任教師との人間関係が一番重要になる。一日中かかわる時間が多いし、子どもとの人間関係や子ども同士の人間関係を安定させ、安心できる学級経営が必要である。

中学校では、担任と生徒との人間関係の厚みや希薄さは関係なくあまり影響されないが、子ども同士の人間関係の雰囲気を把握し、上手くいくような支援の出来る学級経営につとめる。

養護教諭は、小中学校でも目立たないが子どもの相談に乗り、子どもの情報を集め、心のケアに重要な役割を持ち、これからはチーム支援等の中心になっていくよう努める。

その他の先生は、とにかくかかわりを持ち、相談相手になり子どもの様子をよく観察し、担任や養護教諭と違った視点で子どもに接する。

管理職は、全体の子に目を配り、気になる児童や生徒を把握し、保護者や地域との連絡を密に取り危機管理や早急に対応出来る判断力を養わなければならない。

保護者　＜しつけは家庭の責任で＞

家族関係の乱れは子どもに多くの影響を与える。保護者、特に父親が子育てに参加することが子どもの将来にとって重要である。父親の持つ役割、母親の持つ役割、両者が協力して子どもの内面や外面に良い影響を果たすのである。しつけは家庭が基本であり、社会に巣立つ前に常識や知識、ルールやモラルを教え込み、個人の尊重する部分と社会での責任の重さを自覚させる。それに加え心身の健康面に配慮し、よく学べる環境や条件を整備する。

地域　＜誇れる地域を、ふるさと万歳＞

地域の教育力の再生が、子どもにルールを守り、社会規範を身につけさせる基礎になり、人と人とのつながりやかかわり合いが希薄になりがちな人間関係を再構築し、昔ながらの相互扶助の関係（コミュニティー）をつくる。地域が一丸となって子どもを守り育てる為には、誰かに任す、自分はしなくても良いではなく、自分も地域の一員として地域の行事や教育に携わっているという自覚を持つことにより、子どもたちの成長に責任を持つことが大切である。

行政　＜真摯さと真心で地域住民にサービス＞

行政は、子どもたちが学べる環境整備と、条件面でのケアやサービスに努め、各機関がフル回転で住民や子どもたちに利用され、頼られる機構改革が大切である。自ら現場に出向き生の声を聞き情報を察知し、マネジメントを作成し実行に移す。

(2)　連携・マニュアルにかかわる矛盾点の克服

①　学校と保護者、子どもの三角関係の是正

子どもが不登校になったり問題行動を起こしたり、学力が低下したとき、保護者は真摯に原因分析することや、自己責任追求を回避するために、誰かの責任に転嫁しようとすることがある。子どもは、無意識に自己防衛反応が働き、結果的に虚偽の言動として表れる場合がある。保護者も同様で自分の精神状態を守るために責任転嫁を行う場合がある。

学校（教師）は、問題行動や学力低下について、自分の責任ととらえることが少ない。自分たちはがんばっていると思っている。だから、学校の教育方針の間違いや学級経営に何らかの原因があるのではないかと問いかけず、現状のニーズに沿った教育や、真摯な反省の上のマネジメントを作るより、子どもの責任や家庭の責任にしてしまう場合がある。家庭や子どもとのコミュニケーションをとらないで学校の中だけで解決したと思い、そこで安心するので、教育者としての成長は止まるのである。

②　地域・行政の歩む道の是正

地域はコミュニティーとしてのよき働きを失い、情報の共有は無くなり、人間関係は疎遠になる。他家の子どもには無関心、悪いことをしても叱らず、後で誹謗中傷し、共存しにくくなっている。そして、住んでいる地域に愛着を持てない現状では人間関係は希薄になり隣が犯罪を起こしても知らない、何かあれば裁判となるのである。

行政や関係機関は、子どもを取り巻く現状に対して、高い金額で事業を興し、ネットワークや対応機関等を設置し取り組んでいるが、過去数年間の数字からは成果があったとは言い難い。目的に対するマネジメントが出来ていないから、藁をも掴む方法でいろいろな手段に対して飛びつく、そしてその方法がダメなら次に移る。失敗の原因が何か実態を掴まぬまま次に進むから途中で暗礁に乗り上げても解決できない繰り返しである。

そして最大の誤りといえるのは、手段が目的になっていることである。例として、「青少年犯罪予防のために連携」のネットワークを作るということで、ある機関が主催してネットワークを作るとする。ネットワークを作ること、会を主催し人が集まって意見を出すということに目がいき、それができた時点で目的を達成したかのごとく思いこみ、定期的に会を運営しても、それ以上先へは進まない。しかし目的は少年犯罪をなくすことであり、ネットワークの運営ではない。一人でも二人でも減らすためにネットワークが一丸となりアクションを興し、活動して実績を上げることである。このような無駄や失敗に対して誰も責任をとらず、曖昧にすましてしまう。このような体制が事務局から学校現場まで浸透しマンネリ化しているのである。

このようなことを考慮し、現状の実態に合わせたマニュアルを製作した。

7　研究のまとめ

(1)　子どもが学校にがんばって来られる理由

①　学校で友達関係が上手くいき、仲良く遊べること

②　将来のために勉強が必要

③　部活動や教科が楽しい

(2)　学校に来るのに辛い理由

①　だるい、しんどい等の基本的生活習慣の乱れ

②　勉強が分からない、宿題ができない

③　先生が嫌い（小学校）

ア　この子どもたちは、しんどくても辛くても学校には来られる子どもであって、直接の不登校にはつながらないが、怠学傾向に陥る可能性がある

(3)　不登校や問題行動を起こす可能性がある実態

① 困っても話せる友達がおらず、喜びを分かち合う友達もいない
② 家族の中で孤独感があり、家族と喜びも悲しみも分かち合うことができない
③ 勉強や行事にやる気が見出せず非協力的、なげやりになる
④ 人間関係、学校全体を批判的に見て、何も認められず自己肯定感が低い
⑤ 友達関係や学級の中がピリピリしており、常に周りの人を意識し、些細なことで挫折しやすい

(4) 学校ができる子どもに対する予防
① 児童生徒の実態やニーズにあった学校教育方針（学校マネジメント）や学級経営を行う
② 実態に応じた予防マニュアルの作成と実行
③ 分かる授業、楽しい授業とは、この子どもたちにとってどんな授業なのかを見直しカリキュムを作成し実行する
④ 細やかな気配り、温かい学級、ルールの守れる学級の構築
⑤ 人間関係の構築（教師と子ども、子どもと子ども、教師と保護者）
⑥ 役割に応じた子どもたちへの対応と支援
⑦ 真摯で真剣な態度で取り組む態度
⑧ 子ども同士がピア・サポートできる学級、学校を作るための支援

(5) 保護者の役割
① コミュニケーション、かかわり、親子の絆を強くする
② マナーやルールを守る姿勢を、責任を持って身に付くよう愛情を持って育てる
③ 地域とかかわりを進んで持ち、子育てや教育に対する近所の意見や学校の意見を聞き入れる
④ 自分の子だけの話を正しいと受け入れず、正しい状況判断を行う

(6) 地域の役割
① 普段からの近所付き合いを大切にして、自分の親戚や家族だけのことを考えずにみんなのことを考えるようにする
② コミュニケーションを持つことを心がけ、普段からのつきあい等を大切にする
③ 地域で子どもを育てる意識を高め、横のつながりを広める

(7) 行政、関係機関の役割
① 地域参加型の育成会等の立ち上げ
ア 地域へ提言→青年・保護者・婦人会・老人会・育成会等の多くを集め全体会で目標を確認
イ 目標達成に向けての方法を各年齢層で役割分担→各年齢層で手だてを検討し実行
ウ １ヶ月に一度進行度や成果、課題をまとめ報告→一緒にできること、別の方法や手だて等はないか検討し次の月に実行することを決める
エ 関係職員は、デスクワークにとどまらず、各年齢層に入り行動を共にし、意見を聞き分析考察を重ね、問題点や強化面を把握する。しかし中心的な活動は各年齢層や部会に任せ、責任を持たせる。
オ 資金面や人的な支援を行うとともに、活動についてのアピールを地域に入り、手から手へ手渡しする。

8 成果と課題

(1) 成果
① 不登校の分析を行うことにより、高知県の不登校の傾向と対策方法が見えてきた。
② 「学校生活アンケート調査」の実施と分析から「子どもが学校にがんばってこられる理由」や「来られない理由」が見えてきた。
③ 「子どもの問題アンケート調査」から県民の生の声を聞くことができ、マニュアルや資料の参考になった。

④　不登校マニュアルができた。
⑤　子どもに寄り添う研修に参加し学習ができた。
⑥　人権教育や道徳教育がこれからの子どもの教育に重要であることが県民の声から分かった。
⑦　地域ごとの、学級数ごとの不登校の割合が出せた。
⑧　心の冒険教育の研修等子どもを支える基礎技能が身に付いた。

(2)　課題

①　マニュアルの検証と改善
②　リーフレットの作成と配布
③　基礎技能の学校現場での実践
④　子どもを守り育てるためのネットワークの構築

９　終わりに

この１年間の研究を通して、学校現場では得られない体験ができた。資料の数字から見える不登校の実態は解決しようにもなかなか難しい。心に寄り添う方法を基本におきながら、予防策こそが大切だと考え、当初の計画通りに進めることとした。

アンケート調査では､学校に来ている子どもから学校の魅力や学校のつらい部分を聞くことにより、原因を分析した。その結果分かったことは､「しんどい、だるい、眠い」や「勉強が分からない」は学校や周りの支援や努力で解決でき、不登校に至らないということである。そして、最大の支援すべき児童生徒は、10％弱各学校に存在している目立たない無気力、やる気無し、学校に批判的で相談相手がいない子どもたちである。したがって学校は今ある状況を関係者に知らせ、連携し、マニュアルを中心に多くの子どもに目をかける。それと並行してサインを出している 10％の児童生徒に心血を注いで支援し、不登校や問題行動を起こさせないようにあらゆる関係機関、人材を活用してあたらねばならないと考える。

今後は、学校現場で不登校を予防し子どもを守り育てるために、作成したマニュアルを検証することにより子どもの問題をまじめに考えて取り組める仲間をあらゆる層から増やしていきたい。相談や実践を繰り返しながら、何らかの結果が出るためにできるかぎりのことをしたいと思う。更に、学校現場より提言し、県内に広く輪を広げてみたいと考え、この１年間の締めくくりとしたい。